

文化通信

速報

発行所・(株)文化通信社 / 編集・発行人・渡邊裕二

令和7年5月24日(土)第18457号

☆きょうのニュース

第1回は「製作費の資金調達…別の視点からの考察」

代表の楠純子氏が製作委と融資スキームの違い説明

[Film Solutions]社、業界関係者ら集めて勉強会

▽12S2481席、ベストシア、ソラシアター導入

新館「シネマサンシャイン三郷」、7月11日開業

▽トーク「こは日本映画の最前線」に白石和彌、安田淳一

「第34回日本映画プロフェッショナル大賞」授賞式概要

▽松竹『TOKYOタクシー』、4月クランクアップ

▽衛劇、戦争にまつわる映画を6月から3カ月特集

▽マツト・デイモンらプロデュース『キス・ザ』9月26日

▽東宝『恋愛裁判』日本独自のテーマもカンヌでスタオベ

▽田中未来監督『シンジャヤー』カンヌラ・シネフ第3位

▽ザジ「ルネ・ラル」特集で『ファンタ』4K上映決定

▽東宝東和『DROP/ドロップ』、7月11日公開

▽バンナム、ガンダム周年3作品トーク大阪で開催

▽LVJ、TBS発「バースデー」6月29日生中継

▽YUKI東京ガーデンシアター公演、6月に上映

▽Momentunlabo.『水の中で深呼吸』7月25日公開決定

▽ダニー・ボイル長編デビュー作『シャロウ』再上映

▽A24×HPSTOHO、6月は『MEN』を上映

▽フイルマ『海がきこえる』テレカ風のムビチケを発売

▽東京テアトル『ぶぶ漬けどうどす』東京プレミア開催

▽SPE『父と僕の終わらない歌』著名人絶賛コメント

▽HPS『MaxXine マキシーン』、フードコラボ続々

▽全興連「通常総会」事業計画や収支予算など承認

▽KW『ロボット』『トワイライト』BDなど発売

▽デイズニー『白雪姫』BD&DVD、7月23日発売

▽松竹『ロングレックス』DVD、8月15日リリース

▽フイルマ『赤毛のアン』復刻パンフレットの販売決定

大高宏雄の映画業界最前線V.O. 791

4カ月累計興収、「洋画系」配給会社前年増

邦画シェア拡大、洋画実写作品動向変わらず



(株)文化通信社

URL:<https://www.bunkatsushin.com/>

■住所: 〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-7-1有楽町電気ビル南館18階

■メール: info@bunkatsushin.com ■電話: 03-3214-6041 ■ファックス: 03-3214-5466

☆きょうのニュース

◎第1回は「製作費の資金調達…別の視点からの考察」
代表の楠純子氏が製作委と融資スキームの違いを説明
「Film Solutions」社、業界関係者ら集めて勉強会

映像製作管理サービス業などを手掛ける「Film Solutions(株)」は16日、渋谷区文化総合センター大和田で「これからの映像製作ビジネス」と題した勉強会を開いた。

開催までに応募が殺到し、当日も70人以上を収容できる部屋が埋まった。参加者は映像業界（映画・テレビ）の参加者が2/3、銀行を含む金融機関や政府関係者などの参加者が1/3。映画業界では邦画の大手からインディペンデントまで幅広いレンジの参加が見受けられた。この勉強会は、海外展開や働き方改革が急務の課題として挙げられる今、異なる業界の知見を持つ人たちが集まることで新たなビジネスモデルと製作環境をとる模索する場として開かれた。会場の盛況ぶりからは、変革期にあつて業界関係者らの新機軸を求める様子が窺えた。この勉強会は今回が第1回にあたり、6月・7月にも話すテーマを変えながら継続的に開催される。主催した楠純子氏は、銀行勤務の後、国際共同製作のビジネス実務を担当、海外の多様な映像ファイナンススキームに触れてきた。2004年に世界最大の映画完成保証会社「Film Finances Inc」の日本支社「Film Finances Japan」を設立、代表を務める。現在は「Film Solutions(株)」代表取締役として完成保証や国際共同製作のコンサルティングを行うほか、日本映像製作における製作経理をはじめとする工程管理やリスクマネージメントといった資金調達の多様化／グローバル化に不可欠なインフラ整備に注力している。

第1回のテーマは、「製作費の資金調達…別の視点からの考察」。邦画で一般的に活用されている「製作委員会への投資」と、海外で多用されているものの、日本には浸透していない「銀行からの融資」の考え方の違いについて楠純子氏が次の通り解説した。

興行的に当てることを目的とし、日本の映画業界関係者がお金を出し合う「製作委員会への投資（＝エクイティ）」には、ある種の阿吽の呼吸があり、リスクに対して比較的寛容な姿勢。たとえば、制作中の悪天候に際しても、「そういうこともある」とされるケースがある。資金の回収では、権利を持つ人たちは著作権が継続する限り、理論上お金が入ってくる。作品が大ヒットした際にはその比率に応じてお金が戻ってくるという意味で、ハイリスク・ハイリターン構造。

対して、「銀行からの融資（＝デット）」では、銀行側の、元金＋利息（手数料）を確実に回収したい思いが乗る。融資を受ける側の間では、利息（手数料）分をもつたいたいと感じる意識が働きがちだが、逆に言えば、元金以外では、利息（手数料）分のみしか回収されることはなく、大ヒットしなくても、利息（手数料）分のお金をとられる心配がない。であるからこそ、銀行側には期日と予算などを守った上で元金＋利息（手数料）を必ず回収したい思いが乗るため、先に例に挙げた悪天候時にも厳格な態度をとられることがある。そこで、想定されるリスクを管理する「完成保証」の仕組みが存在し、Film Solutions社は、前記の「Film Finances Inc」と提携し、グローバルなリスクマネージメントを提案している。原則として、銀行側

は、回収が見込める範囲でのみ資金を提供する性格を持ち、ローリスク・ローリターン構造。

海外で多用されている「銀行からの融資」の手法は、1990年代や2000年代、日本の作品（『レイン・フォール 雨の牙』など）や日本が参加する合作（『始皇帝暗殺』など）に前例はあるものの、定着していない。主に日本市場を対象とし、比較的小規模な「製作委員会への投資」作品に對して、「銀行からの融資」作品は、世界市場を対象とし、大規模予算で臨むものに適していると考えられている。投資家の立場からすると、「銀行からの融資」を併用したスキームは、投資家のみによって構成される「製作委員会への投資」よりも配分比率が高まる。このように「銀行からの融資」を用いることによって収益性を高めることを「デットによるレバレッジ効果」と呼び、業界「外」の投資家が一般的に投資対象に求める要件となっている。また、回収のタイミングが主に公開以降のみとされている邦画の「製作委員会への投資」では、企画開発の時点でお金を出しても、ポストプロの時点でお金を出しても、リターンは同じであり、「期間」と「リスク」を度外視したリターンであると言えるが、海外で展開されているグローバル作品では、回収のタイミングが複数回（撮影開始時、完成時、公開以降）あるなどのメリットが見受けられることにも触れられた。

ある映画会社（インディペンデント）の参加者は、「課題に感じるのは、日本とアメリカの映画産業規模が100倍ぐらい異なるから、これまで（日本の）金融界にも（映画に融資することの）メリットを感じられなかったのでは。日本映画の産業規模は納豆とか、カット野菜とかと言われている。たとえば、納豆工場にお金を出す人はいても、納豆自体にお金を出す人はおらず、映画自体に融資してくれる金融機関は限られてくるのでは。日本の小さい映画にも融資してもらええる可能性はあるのだろうか」と質問。これに楠氏は、「おっしゃるようには小さい規模の作品に（大きい規模の作品と同等の）コストや労力をかけて、銀行がファイナンスすることはなかなか難しく、これは欧米でも言えること。ただ、1本1本はやらないけれど、まとめて小さめの作品を10本やります、というのではあればまだ可能性はあるかもしれない」と回答。同じ映画会社の参加者は追加質問で、「全体を数十億規模として、1億円の規模を10本ぐらいまとめて出すのが現実的だろうか」と聞く。「それも、おそらく金融機関的には小さい。1本3〜5億円ぐらいないと難しいはず。融資スキームの組成に必要な諸々のコストは、映画1本と同じぐらいかかるのではないだろうか」と楠氏。

ある銀行の参加者の質問は、「製作委員会方式に対して、銀行融資の手法が日本で進んでいない理由とは」というものだった。楠氏は、「鶏が先か、卵が先か、みたいなところがある」と切り出し、「金融機関の人たちと話をすると、金融機関が積極的に組みたい相手の方は、お金がある方たちであることが多い。それに対して、製作委員会で大きなバジェットを目安には10億円というのが一つあると思うが、これが50億円というラインになれば、銀行の方々と目線が合ってくるのではないだろうか。お互いが見えなくなっているなか、どう突破できるかが一つのポイント。国内ばかりを見ていないと、突破することは難しいが、海外市場を目指すグローバル作品は否応なく海外と組まざるを得ない。海外のプロデューサーは、今日話した彼らのスキームを普通にやっているの、デットのスキームを経験すれば日本でもデットの形がいずれ浸透するのでは」と私は想像している」と期待を込めた。

了